

---

# 私の選んだ幸せ

爆弾蛙

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

私の選んだ幸せ

### 【著者名】

NZマーク

N9259D

### 【作者名】

爆弾蛙

### 【あらすじ】

平和を謳うカルボトミヤ王国。だが、国は攻められるばかり……。  
この物語は一人の騎士が選んだ幸せへの物語。

(前書き)

なんたやつて騎士道物語

カルボトミヤ王国のその象徴たるカルボトミヤ城は、その全てを隣国のベルストリア王国により炎に焼かれ、その半分をまた別の隣国、スクリアス王国によつて壊されていた。

要するに、カルボトミヤ王国はベルストリア王国とスクリアス王国の同盟軍によつて滅ぼされてしまつたのである。

四方を山と川に囲まれた自然要塞の”王都カルボトミヤ”が、わずか一日で落とされてしまつたのは、立て続けて起きた他の隣国との戦により疲弊したところを一気に攻められたからだ。平和を謳い、戦を避けるその姿勢は五つの隣国によく思われなかつたといふことだつたのだ。

そして今、一つの平和を謳ひつゝ国は、この戦乱の世界で栄える口と無く消えていくのであつた。

月が最も高い位置にある深夜。

日の出と共に始まつた戦は終戦へとなり、今や残党狩りだけとなつた。

焼け落ちたカルボトミヤ城を南方に置く、カルボトミヤ領で最も高く深い山、“カルボトミヤ山”の山道を4人の人影が走る。

私の名前はヴォルム＝クローム。

カルボトミヤ王国の魔導騎士をしている。

魔導騎士とは、魔術を扱う事のできる騎士か魔力を宿した特別な鎧、“魔騎装”を使う騎士の事を言い、私の場合はその両方になる。

今私は、この戦に負けを覚悟したカルボトミヤ国王により、王の一人娘である、カルミヤ＝ベルフォ＝カルボトミヤ王女を安全で、平和で、幸せと思える所へ送り、守り通すといつ命を仰せつかつているのである。

だが、その為に用意した洗練された20人の兵からなる護送隊であつたが、國が落ち、残党狩りが始まると、その数を徐々に減らし、今や三人、魔導騎士である私と、幼馴染みの天才魔術師のルミア＝ピリアと、戦士ゼボルム＝ゴートのみである。

残党狩りが始まったのが、夕刻<sup>てだれ</sup>。

それを考へると相手にかなりの手練の者がいるのだろう。

「ヴォルム……街の人々は大丈夫でしょうか……」

「姫……大丈夫ですわ。民の為必ず生き残り、カルボトミヤ王国を復興させましょう」

「ルミア……」

姫の不安そうな声に、ルミアがすかさず励ます。

「ヴォルム殿。この後どうなされます？　このまま走つていっても拉致があきませんぞ」

ゼボルムの言つとおりだと思う。

このままでは、また、すぐに敵に見つかってしまうだろ。  
そう思つたその時だった。

「キヤアアアツハツハツハツ」

耳に付く独特な笑い声。この声の持ち主は、

「やつと追いついたぜ。お姫さんよお。そして、我がライバル、ヴァルム＝クローム！！」

深紅の鎧を持つ、隣国ベルストリア王国の魔導騎士、バルロス＝バズロ。

性格に問題が有るが、腕の立つ魔導騎士で、無論、魔法と魔騎装、両方を使う魔導騎士である。

残党狩りの指揮をしていた手練とはやつだつたのか。  
私はすかさず剣を抜き、戦闘態勢に入らうとしたが、

「ヴァルム殿。貴殿は姫を連れ先にお逃げくだされ」

「そうよ。ここは私達でどうにかするから……ヴァルは先に逃げて、すぐに追いかから」

ゼボルムとルミアが私の前に立ち、姫を連れ、逃げるよう促してきた。

少し迷つたが、姫を危険にさらす訳にもいかないので二人の指示に従つ事にした。

「おいおい、オレッち等も甘く見られたもんだなあ！おい。『すぐ追いかから』かあ……泣かせるねえ。安心しろ、オレッちが代わりに追いかけてやるよ。しかもその後チャーントみんな同じ場所で会わせてやる。お姫さんに関しては、大ちゅきなパパやクソみたいこの国人達に会わせてやるよ。キヨホッホホホ」

狂った様に笑うバルロス。

確かにバルロスの後ろにはベルストリアの兵とスクリアスの兵が多く控えており、たつた一人では到底太刀打ちできそうに無い。

やはり私も戦うべきだ。

私がまた、剣を抜こうとした時、ルミアに怒鳴られた。

「早く姫を連れて逃げて!!!! 王から命令を受けてるんでしょ。早く行けよ……バカ!!!」

そうだ。

私は王の命を全うしなくては。

私は姫を抱き上げ、ルミア、ゼボルムを背に走り出した。

「おいおい、みつともねえなあ～。それでもカルボトミヤ王国魔導騎士団副団長かよ。まつ、とりあえずお前ら一人を料理するとしか。なああ? まあゆつくり料理してやる時間がねえが、悪く思つなよ」

ルミア達を残した場所からは、バルロスの不気味な笑い声がこだましていた。

「ヴォルム。なぜ逃げたのですか? ルミアが……ゼボルムが……」

一時間ほど走り、崖沿いの山道で姫を下ろと、姫から非難の言葉が私を責めた。

「ですが……姫……」

「私だって戦いたかった。だが……」

「言い訳は要りません」

「姫さんの言う通りだぜ。ヴォルムさんよお。お前が逃げたおかげで、一人は天に召されちゃいました。あひやひやひやひや」

「バルロス！…」

「そんな……ルミア……」

「うひょひょひょ。手下を失つて悲しい悲しいお姫さんヒフレゼントでえす」

「手下でわありませんわ。大切な友人よ」

バルロスの無神経な言葉に怒る姫。

「はつ、そうかよ。まあいい。ほりよ」

バルロスは姫のそんな言葉に氣を悪くしたのかしかめた顔で、何かを姫に向けて投げた。

何なのかと身を構えると、それは、血まみれのペンドントだった。それを姫が上手く受け取ると、直ぐに顔を青くした。

「わ、私が……渡し……た……ル、ルミアの……ペンダント……」

「タアアアヒヤッヒヤッヒヤッヒヤアアア。なんか大切に持つてたからよお。持ってきてやつたぜ。キヨオホツホホホ。にしてもその魔術師なかなかだつたぜえ。兵の殆どを殺つたのは、そいつだしよお。オレっちに何発も魔法ブチ当ててくるしよお。おかげでここに

は、オレっち一人、ボロボロになつて来るハメになつちまつたよ。  
後、そいつの返り血……気持ち良かつたぜえエエエエッヘツヘツヘ

貴様 ルミアを

「立腹かい？」  
「立腹かい？」「立腹かい？」  
「立腹かい？」  
「立腹かい？」

バルロスは、おもむろに手のひらを向け、雷撃。

巻き起しの爆音と爆煙。

奴が放つたのは、雷属性初級魔術、“ライトニング”だ。

「バル口——ス！！！」

「ウウウヒョアッヒョアッヒョアッヒョアッハツハツハアア。良い  
ね。良いね良いねえええ！－！－！ その顔、その気持ち。キヤアアア  
アツハツハツハツハア。わあやうづ。わあ殺し合おう

バルロスは、その身に纏う深紅の鎧が一気に膨れ、3m程の赤い  
甲冑の巨人へとなつた。

コレが魔騎装の力である。

## バルロスの挑発。

今日ばかりは乗つてやるよ。

バルロス、貴様を殺してやるよ。

「…失敗せへば」

私は剣を抜き、自分を守る鎧に魔力を込める。

その鼓動が、私の鼓動比余りに重なる

その鼓動が私の鼓動と徐々に重なり始める

り、そして大きくなつてゆく。

気付には私の直線は 3m の位置までになってしまって、私は、今、甲冑の三人となつたのだ。

右手を見てみる。

そこには握られた剣があり、剣もまた、人の時のサイズでは無く、3mの巨人に似合つたサイズへと変わつていた。

「わあわあわあわあわあわあ……」始めましょう。金銀の騎士たるよおーー。」

「ああ。姫の仇。ルニアの仇。必ず取らせてもうつぞ。深紅の騎士よー！」

私は、背後に崖が有るのは不利と考え、すかさずバルロスの右へとまわる。

たが、ハルクはそれを予想してたかの様に、自然な動作で剣を切り上げくる。

転をする。

そして、その勢いを利用してバルロスに斬りつける。

い。だが、当たったのは刃先1cmほど、大したダメージにはならな

次に私は距離を取り、魔法を使う事にした。

バルロスも同じ様に魔法を使うのか何やら呪文をつぶやいている。

私は、剣先をバルロスに向ける。

そろそろ呪文が詠み終わる。

「「エクスプロージョン」」

唱えた魔法は、火属性上級魔法のエクスプロージョン。

剣先から放たれるのは、連続する爆発。

爆発は真っ直ぐバルロスに向かつて行くが、奇しくも、バルロス  
が放つ魔法は、私と同じエクスプロージョン。  
実力は互角。

ぶつかり合つた双方の魔法は凄まじい爆発と共に相殺される。

「ちつ……」

つい、舌打ちが出てしまう。

ふと、大量に残る爆煙の向こうに動く赤い影。  
バルロスが既に動き始めている。

「判断遅くなあああ～いいい？？？」

爆煙の中から飛び抜け、斬りつけてくるバルロス。

それを、盾を捨て、剣で受ける。

絶え間なく人体の急所へと斬り込まれるバルロスの斬撃を、私は  
全て受けきる。

私も負けじと、ほんの僅かに現れる隙を見ては、バルロスと同じ  
ように人体の急所へと斬りつけてゆく。

だが、バルロスも私と同じように、それら全てを剣で受けれる。

そんな、互角の一進一退を私達は一時間ほど続けた。

だが、私達にとっての一時間は10分に満たない様に感じられる程だった。

剣と剣が顔の前でぶつかり合い膠着する状態、要するにつばぜり合いの形になる。

「いいねええ。たまらないねええ。嬉しいねええ。たあああ  
あのしいねええ」

「貴様を倒す！！」

「うひやひやひや。仲間を見捨てた奴の言葉かね。あの女。ルミア  
と言ったか？　あいつの最期の言葉教えてやるよ。『ヴォルム……  
幸せでいて……』だつてよ。キヤハハハ」

ルミアの最期の言葉をおどけて言つバルロス。

貴様と言つ奴はああー！

「よつぽどヴォルム殿の事が好きだつただろうな。オレつち涙が出  
ちゃうわ。ビヨホホホ」

えつ……

「はつ、大きな隙、はああつけええん。ダメダメだぜ。朴念仁く  
ん。ナハハハ」

バルロスは、驚く私の顔を見てニヤリと笑い、私の左腕を奪つて  
行つた。

吹き出る鮮血。

すぐに、魔騎装により止血されたが、私は痛みにその場に膝をついてしまった。

そして、私の返り血を大量に浴びたバルロスはいつと、

「キヤハハハアハツアハハハ。コレが我がライバルの血か……い  
いねええ。たまらない。芳醇だよ。濃厚だよ。イヤツハハハアア  
…………もつとくれ。もつと浴びさせてくれや」

狂ってる。

だが、今の私に、奴を倒す力があるのだろ？

「だああが、オレっちは我慢するよお。何故なら、あのルミアって  
女をゆっくり料理する時間が無かつたからなあ。アハヒヤヒヤヒヤ  
ヒヤ。ヴォルムくん。君はゆっくり料理するよ？ いい？ まず  
はその目を潰すね。キヤハツ」

バルロスは、そう言つと何のためらいも無く、鎧ごと私の左目だけを潰した。

「ぐおおおおー！」

「うへへ……ん。いいねええ。その反応。次は右目ねええ」

「ここまでか……ここまでなのか！？」

私はここで終わってしまうのか！？

『凄いよ、ヴォルム！－ 魔法まで使えるなんて』

『そうですわ。ヴォルムはただの騎士で終わるような方では無いの

ですわ。魔導騎士に志願すべきですわ『

ふと思い出す懐かしき思い出。

この言葉はルミアと姫のものだ。  
確か、騎士としてスランプに陥つ<sup>おちい</sup>っていた時、二人が気晴らしにと  
魔法を教えてくれた時のものだ。

走馬灯なのだろうか……。

あの後、二人に励まされながら血のにじむような努力をしたなあ。  
もう少し……もう少し頑張ろう。

一人の……仇を取ろう。

「どうしたのかなあ？ 蹄めちゃったのかなあ？ アハヒヤヒヤヒ  
ヤヒヤ！」

ゲスが！！

お前は、二人に教わった初めての魔法で倒す。

「アイスニードル」

氷属性初級魔法。

それをバルロスの背中に当てる。

「ハア？ 今更その程度！？ 笑わせるね。雑魚が！……失望  
だよ！ 幻滅だよ！」

ほとんどダメージは無い。

だが、喚くバルロスをしり田に何度も、何度もアイスニードルで  
奴の背中を攻撃する。

そう何度も。

「アイスニードル。アイスニードル。アイスニードル。アイスニードル。アイスニードル。アイスニードル。」

短縮詠唱の上に高速詠唱、そして重複詠唱。

有らん限りの技術を使い、アイスニードルの呪文を唱える。

ふと、アイスニードルを覚えたての頃の事を思い出した。  
とにかくアイスニードルを極めようと訓練した事を……  
笑われながらも必死に訓練した事を……。

「ウザい。ウザいウザいウザいいいい！！！ ウザいぞおお！ ヴ  
オルムウウウ！！」

バルロスには気づいてないようだ。

「死ねや。ヴォオルムウウウ…………ん！？」

ふつ勝った。

バルロスの背中は、大量のアイスニードルにより、凍りつき固ま  
つて居るのだ。

私は動きの止まったバルロスの体に、残った右手と体を用一杯使  
い剣を突き刺す。

「うがつ！！！ あは……はは……はあ……。さすがは“氷柱のヴ  
オルム”だな。アイスニードルでオレっちを氷漬けにするとは……  
チリも積もればか……だはつ！！」

「貴様だけには、楽に死なせるわけにいかない。さらばだ、“血浴  
びのバルロス”……アイスニードル」

「姫……」

バルロスを葬はうむった私は、姫が立っていた辺りを呆然と眺めていた。地面はえぐれ、まるで崖崩れを起こしたようだつた。

「姫……うわっ！　うわあああーー！」

ふらふらと崩れた崖に近づくと、やはり脆くなつていたのか、私も崖のしたへと落ちていつた。

見事に地面に叩きつけられた。  
バルロスとの戦いで、だいぶ体にガタがきていたが、死にかけても副団長。

「こには何とか体を持ち上げる。

周りを見渡して見る。

視界の端に見覚えのある布地が見えた。

私は急いで駆け寄る。

そこには、もうお皿にかかる「トなど無いと思つた姫が横たわつていた。

体の上には土が被つている。

急いで掘り出す。

幸いにも、顔には土が被つておらず、息もある。

「よかつた……生きてる……」

私は姫に息があることに安心をしたが、次の瞬間、私は崖を眺めている時以上に呆然するしかなかった。

「んつ……うつん……ん……えつ……あ、あの、誰ですか？」

私が、姫に息があることに安心した直後、姫の目が醒めたのだが、私は本当に呆然するしかなかつた。

「えつ……？」

「す、すみません。あの私が誰か分かりますか？　あつ、うづ……」

頭が痛いと、頭を押さえる姫。

コレは記憶喪失と言つものだろつか……

「あなたは……」

私の名前は、カルミヤ＝サルコンと言ひつい。

どうやら私は記憶喪失と言つものになつたらしく、今、3mぐら  
いの巨人になり、私を抱き上げ走つている殿方、今は亡き王国の魔  
導騎士、ヴァルム＝クロームさんに私は救われた。

ヴァルムさんは、しきりに『巻き込んで済まない』と謝つてくれ  
た。

なんでも、追つ手との戦いに私を巻き込んでしまつたと言つ口ト

らしい。

私にしてみれば、目立つた外傷も記憶喪失以外に見当たらないし、確かに昔の事が思い出せないのは、少し寂しいけれど、今、傷だらけの体に鞭打つてまで私を運んでくれるヴォルムさんには文句は言えない。

それに、思い出ならまた作ればいい。

「ヴォルムさん……傷、大丈夫ですか？ 腕とか……」

「大丈夫だ……鍛えて有りますから」

「そ、そりですか……あの、どこに向かっているのですか？」

「とりあえず遠い所。戦の影響の無いところ……かな？ カルミヤさん、一緒に行きませんか？」

えっ！？

でも、迷惑じや……

「迷惑ならいいです。でも……出来ることなら君と一緒に行きたい」

あれから10数年の年月がたつた。

私達は、今なき祖国“カルボトニア王国”から幾つもの国をへた先にあつたのどかな山あいの小さな村に行き着いた。

私はこの村で道場を開いて生計を立てている。

そして、魔術の知識のある我が妻、カルミヤもまた、魔術の教室を開いている。

妻、カルミヤの記憶は一向に戻る気配を見せない。  
それでも、妻は、

『今が幸せなのだからそれでいい。過去を知りたいとは思うけど、  
今の幸せを失ってしまうかもしれないから思い出せなくてもいい』  
と言つてくれた。

私は妻が幸せならそれでいい。  
私が成さなければならないことは、おそらくそれなのだから。

「あなた～。お弟子さんがむづいらしてますよ」

「ああ、わかつた」

「ねえパパ！ 今日からお稽古一緒にやつて言ことよね」

「そうだな。お前も、今日で一〇歳たもんな。パパもお前ぐらいの  
年で始めたし……よし、稽古を付けてやるわ」

「やつたあーー！」

みな、順風満帆にいっている。

私の選択は間違つていないと思つ。

私は  
…

幸せ  
だ。

(後書き)

ああ～～～！！！

穴が有つたら入りたい！！！

ジャンルにこ都合主義があつたら即選びたい。

実力アップを目指したいので、評価お願いします。

騎士道つてなんだあ！！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9259d/>

---

私の選んだ幸せ

2010年10月22日00時29分発行